

座右の銘



吉栖 正生 大学院医系科学研究科 医学分野 心臓血管生理医学 教授

歴史に学ぶ

座右の銘とは、端的に言えば、その人の生き方を表す「倫理」だと思います。大学入試の一次試験で、分かりにくい「政経」と、距離感のある「倫社」を捨てて「日本史」と「世界史」の選択に走った自分としては、ずっと無縁の世界でした。だいぶ前に、愛読書を聞かれたことがありました。少々考えて、塩野七生さんの「ローマ人の物語」としました。読んだのは1回だけで新潮文庫版全43巻です。「ローマ人の物語」は、歴史書ではなく小説家としての歴史記述と位置づけられ、歴史だけではなく、文化や宗教、産業や経済など人々の姿が生き生きと描かれています。

トーマス・マンの畢生の講演「ドイツとドイツ人」、中公新書「アデナウアー」、同新書の「チャーチル」などにも感銘を受けました。これらの本は、困難な時代の人間の生き方について、多くの指針を与えてくれます。

と言うわけで、私の場合、座右の銘は、部屋の掛け軸に「自他共栄」といった四字熟語が書かれているイメージではなく、古よりの多くの人々の姿がパッチワークとして縫い合わされたキルトが壁に掛けられているイメージになります。従って、歴史に登場する多くの人たちのありのままの姿に学ぶという意味で、座右の銘は「歴史に学ぶ」とします。なおビスマルクの言ったものがある有名ですが、むしろ古今東西、共通する一般的な表現としての「歴史に学ぶ」になります。



梯 正之 大学院医系科学研究科 保健学分野 健康情報学 教授

求めよ、さらば与えられん

以前のことで、モットーのようなものは何かと問われ、このように答えたことがあります。とはいっても、本当にそうでしょうか？世の中には、いくら求めても手に入らないものがたくさんあるように思われます。それを求め続けて、一生を棒に振りたくないでしょうか？

だが、と思います。全くできそうになかったことを成し遂げた人たちがたくさんいます。彼らが言うのは、諦めなかったからこそ成功したということ。諦めたらそこで終わりだが、続けてゆけば新しい可能性が開けてくる。一方、過去に大きな投資をしたため、損失が出るとわかっているにもかかわらず投資をやめられない心理が働くことは「コンコルド効果」と呼ばれ、間違った考え方だとされています。しかし、失敗を重ねることでどんどん経験を積み賢くなっていくのなら、できる可能性は高まっていく。ならば、求め続けるのが賢明かもしれません。だから、できるか、できないか、その見極めが大切、そして、何を求めるかがもっとも大事といえるかもしれません。文脈から何を求めるべきかが自明であった時代は過ぎ去ったように思います。

私もあと一年足らずで退職の身となり、「少年易老学難成」を実感する日々です。しかし、今や人生100年時代と言われ、老年はなかなか死なない。ならば、「老年死に難く、学成り易し」かもしれない、もう少し求め続けようか、などと思うこの頃です。求めるプロセスそのものが価値あるものとなるのかもしれない。